

戦国の千曲川物語

高橋 昌一

目次

- | | |
|--------------------|-----------|
| 1:はじめに | 4:真田一族の苦難 |
| 2:千曲川流域の風土 | 5:真田一族の残照 |
| 3:真田の郷(さと)と真田一族のこと | 6:おわりに |

1. はじめに

私が少年時代を過したのは、岡山県の瀬戸内海沿い。とは言っても、海岸縁(べり)に走る山並みが壁となり、海との間が隔てられていた。そこは、畦道(あぜみち)で区切られた水田が続く稲作地帯。生活圏の狭い当時の私にとって、海岸縁の山へ登ることは、外の世界の発見でもあった。たかだか標高100mから200mくらいの山ではあったが、その稜線まで登りつめると、吹く風も海の香りを含んだものとなり、眼下に光る海を隔てて、当時行ったこともなかった四国の連山が見渡せた。

私は、長じて、その地を離れたが、行く先々でも自然と山に足が向いた。無名な山から有名な山、全ての山に特徴があり、印象に残っている。別(わ)けても印象深いのが信州の山々である。山そのものもいいのは衆目に違(たが)わないところであるが、私は、山を下ったところの風情(ふぜい)が好きなのである。そこでは、周囲の山々と谷間の様子が程良く融合しており、今なお、戦国の息吹が感じられるのである。中でも特筆されるのが、戦乱相次ぐ戦国時代、優れた民政術でもって、この地域に根付き並外れた知略と勇猛さを兼ね備えながら、列強の間で苦闘した真田一族の生き様である。その山々と戦国の歴史が醸し出す風情が、名立たる詩人、歌人なども引付けるようであり、詩歌などの多くの優れた作品が残されている。私には、真田一族の生き様も、千曲川流域の風土が編んだ1つの優れた作品として感じられるのである。これらの作品が漸(ようや)く心に響くようになった今、作品と風土が織り成すところを山行きの余禄として描いてみたい。



奥深い信州の山間(やまあい)を緩やかに下る千曲川

2. 千曲川流域の風土

信州が色彩豊かな表情を見せるのは、高原の緑がニッコークスゲ(ユリ科の植物)の黄(き)で覆い尽くされる季節である。一昔前になるが、私は、ちょうどその季節に霧ヶ峰・蓼科(たてしな)高原周辺をトレッキングした後、延々と東に山道を辿り小海線(別名、八ヶ岳高原線)が走るところまで下ったことがある。そこには、名にし負う千曲川の清らかな流れがあった。

今改めて千曲川流域の地形を調べてみると、起伏に富んでおり興味深い。この地域の地勢は高く、標高300から700m。まわりには日本の脊梁山脈が走り、大小の山岳が重畳している。西は、全長800kmにも及ぶ立山連峰に代表される北アルプス。南は岩の峰が並ぶ八ヶ岳連峰。更に、その外側を南アルプスと奥秩父の山々が取り囲む。東には、浅間山とそれに続く峰々がある。この浅間山は、和歌にも屡々(しばしば)詠まれており、歌人・尾上采舟の歌に以下のものがある。

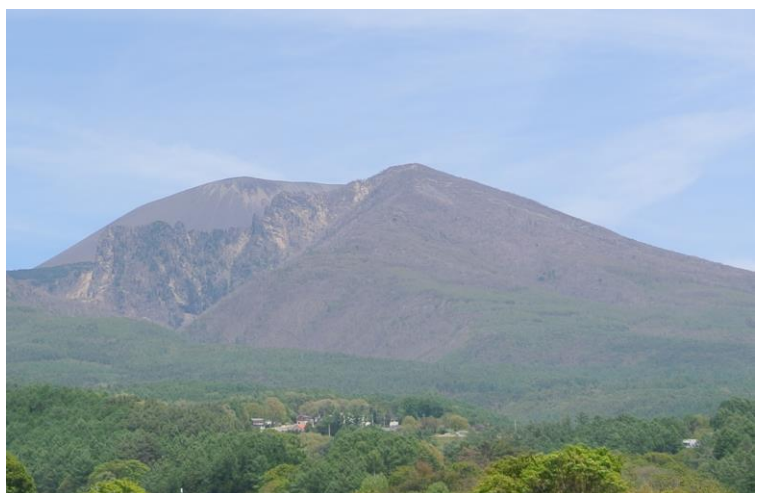


信州の高原の初夏を彩(いろど)るニッコークスゲ

夕べなお青きみ空に盛り上がり 浅間の煙 雲に紛れず

この歌は、嘗ては、もくもくと上がっていたと聞いている噴煙の様子を言い得て妙(みょう)である。

また、この浅間山は、梅原隆三郎ら多くの画家によって描かれている。とかく、美しい山は、多くの画家をも魅了するようである。フランスのセザンヌ(Paul Sezanne)は、故郷のセント・ビクトワール山を描いた作品で有名。イタリアのセガンティーニ(Giovanni Segantini)は、スイスのアルプスに移り住み、雄大なアルプスの風景や、そこで暮らす人々を描き続けている。



噴火の跡の荒々しさを隠して穏やかな表情の浅間山

北原白秋も、この浅間山の麓の落葉松(からまつ)の林を歩きながら感じた思いを、落葉松と題する新体詩(明治期の近代詩)に綴(つづ)っている。以下はその一部である。

落葉松の林を過ぎて 落葉松をしみじみと見き 落葉松は寂しかりけり 旅行くは寂しかりけり
(中略) 落葉松の林を出でて 浅間嶺(あさまね)に煙(けぶり)立つ見つ
浅間嶺に煙立つ見つ 落葉松のまたその上に
(中略) 世の中よ あわれなりけり 常なれど うれしかりけり
山川(やまがは)に山川の音 落葉松に落葉松の風

この新体詩の風情は、私が曾(かつ)て信州の地で眺めたことのある、縞枯(しまが)れた針葉樹林が裾野に趣を添える蓼科山のそれとも符号する。

美しい山々の間には、幾つもの盆地がある。それぞれの盆地に段差があり、それらの段差を縫って、千曲川が緩やかに流れる。その源流は奥秩父の甲武信ヶ岳(こぶしがたけ)。雪解け水を集め、大勢、北へ流れ、中央で東に曲折。やがて、日本一の長さを誇る信濃川の大流となり、越後平野に出て日本海に注ぐ。この地域の風情を良く表しているのが、島崎藤村の新体詩、千曲川旅情の歌である。その冒頭は、



千曲川に雪解け水を注ぐアルプスの山々

小諸なる古城のほとり雲白く遊子(ゆうし)悲しむ

というもの。遊子(ゆうし)とは旅人。覚えやすい七五調の文体であり、以下、

緑なす繁縷(はこべ)は燃えず 若草も敷(し)くに由(よし)無し

…と続く。

藤村が、この歌を作ったのは早春。春とは言うものの、それは信州のこと。草花の芽生えの緑も、目を凝らさないと気付かないほどで、伸び始めた下草も腰を下ろすには十分ではない。遠くの山々は、雪が溶けはじめているものの、残雪で白く輝いていると謳(うた)われている。当時、藤村29才。信州・小諸義塾の教師であり、この新体詩は、千曲川の岸部に立つ小諸城で詠まれたもの。明治34年に発表され、我が国近代詩に残る名作として知られる。その後、後編とも言われるべきものが発表されて

いる。それは、前篇ほど知られていないが、千曲川の描写が際立っている。長くはないので、以下、全文を引用する。

昨日(きのふ) また かくて有りけり 今日も また かくて有りなん
この命 何を齷齪(あくせく) 明日をのみ 思い煩ふ
幾度(いくたび)か栄枯の夢の 消え残る谷に下りて
河波(かわなみ)のいざよふ見れば、砂まじり水巻き帰る
嗚呼(ああ)古城 何をか語り 岸の波 何をか答ふ
過(いに)し世を静かに思へ 百年(もゝとせ)も昨日(きのふ)のごとし
千曲川 柳霞みて 春浅く水流れたり 只ひとり岩を巡りて
この岸に愁(うれひ)を繋ぐ

この千曲川流域は、戦国時代、濃密な時間が流れていたところであり、歴史探訪に事欠かない。

3. 真田の郷(さと)と真田一族のこと

この千曲川の流域には、真田幸隆(ゆきたか)(後述の幸村の祖父)の築いた松尾城の跡がある。この城の別名は真田本城。その周辺は、真田の郷と呼ばれており、真田一族の祖先が、民を治め、兵を養った処である。

この千曲川流域は、甲斐(今の山梨県)の武田信玄と、越後(今の新潟県)の上杉謙信の二大勢力が拮抗したところ。真田一族は、幸隆の頃から、一方の雄、武田信玄に帰属している。

曾(かつ)て、越後の春日山城にあった謙信が南下して、信州の川中島で、何度も、信玄と激突した。この川中島は、西方の北アルプスの山麓に端を發した犀川(さいがわ)が千曲川に合流する地点にある。日本外史を著した江戸時代の歴史学者、頼山陽が川中島の戦いを題材に以下の漢詩を作っている。

鞭声肅々(べんせいしゆくしゆく)、夜河ヲ過(わた)ル
暁(あかつき)ニ見ル千兵ノ大牙(たいが)ヲ擁(よう)スルヲ
.....

大牙とは、信玄の風林火山の旗印である。この辺りの千曲川は、馬で渡れるほどの浅さであるが、川幅は広い。この川中島の戦いでは、武田信玄と真田一族の緊密さを示すエピソードが残っている。夜陰に乗じて密かに千曲川を対岸に渡った謙信が、朝日を背に単騎、信玄に切りつけてきた時のこ

と。いわゆる武田二十四将の一人であった真田幸隆は、常に信玄の傍らに在り、身を挺して信玄を撃たせなかったと伝えられる。将(まさ)に、前出の漢詩の結句、

流星光底(りゅうせいこうてい)、長蛇(ちょうだ)を逸(いつ)ス。

の場面である。長蛇とは信玄のこと。老練な信玄を撃ち損じたストイックな謙信の切齒扼腕のほどが見て取れるようだ。真田幸隆は、信玄のもとで、その卓越した戦術と、優れた民政の方法を学んだ。信玄の居城は、甲斐・甲府の躑躅ヶ崎館(つつじがさきやかた)。この城は、いわゆる山城ではなく平城であり、この信玄の治世は、後に、人は石垣、人は城と謡(うた)われ、その勢力は、質・量ともに、絶大で揺るぎなかった。徳川家康は、信玄の大軍と三河の三方原(みかたはら)で激突している。これが、三方ヶ原(みかたがはら)の戦い。信玄は西上作戦の途上であった。信玄の軍は厚く、魚鱗(ぎょりん)の陣形。これに対する家康の軍は薄く、鶴翼(かくよく)の陣形。一度破られたら交替する味方もないものであった。当時、家康は若く、家臣の反対を押し切って決死の迎撃に出たのである。この時、家康は大敗し、数人の家臣に守られ這う這うの体(ほうほうのてい)で南の浜松城に逃げ帰った。その後、家康はこの時の苦難を忘れず、終生、事に当たると伝えられる。

このように破竹の勢いの信玄であったが、家康を蹴散らして間もなく陣中で病没している。家康ばかりでなく、次の標的であった織田信長も命拾いしたのである。

武田の勢力は、この信玄の死によって大きく傾いた。信玄が亡くなって十年後、継嗣(けいし)勝頼も織田信長・徳川家康の連合軍によって三河国・長篠(ながしの)の地で一敗地にまみれている。世に言う長篠の戦いであり、信長の鉄砲隊が出現。武田勝頼も武勇に優れた武将であったが、最早、戦いは謙信が敵の信玄に塩を送った時代のもではなく、戦国最強の武田騎馬軍団も信長の革新的戦法には通じなかったのである。勝頼は、連合軍の追討作戦である天目山の戦いで自決に追い込まれている。

4. 真田一族の苦難

真田一族は、信玄という大きな後ろ盾を失った。そのため、千曲川流域は、東海の徳川家康と小田原の北条氏政の草刈り場となった。真田昌幸(まさゆき)(後述の幸村の父)は、関ヶ原の戦いを前にして、堪(たま)らず家康に服している。

しかし、将(まさ)に家康が会津・上杉景勝(かげかつ)の討伐に向かうべく徳川方の軍を進めていた時、これに従軍していた昌幸は、家康に反旗を翻し、上杉・討伐から離脱して



二度に及ぶ徳川の大軍の敗走も今は昔の上田城

いる。次男である信繁(のぶしげ)こと、幸村と共にである。そのため、昌幸・幸村父子が籠る上田城が、家康の長男、秀忠の大軍に攻められている。これが第二次上田合戦。徳川秀忠の軍が3万8千。真田軍がその十分の一以下の僅か2千。この戦いで、昌幸・幸村父子は、相手方の動きを見透かした巧緻な戦術を駆使して、徳川の大軍を撃破している。因(ちな)みに、真田軍は、この戦いの15年前にも同じ上田城に襲い掛かる徳川の大軍を退けている。これが、第一次上田合戦。従って、都合2回、鮮やかに小が大を食ったのである。この戦いは、楠木正成(くすのきまさしげ)が鎌倉幕府の大軍相手に奮戦した千早城の戦いに比肩される。このように、何度も危機を凌(しの)いだ真田一族であったが、世は戦国、その後も真田一族の苦難は続く。

関ヶ原の戦いでは、真田一族は東軍と西軍に分かれて戦っている。徳川方から離脱した昌幸と次男幸村の父子が西軍、徳川方に残った昌幸の長男信之(のぶゆき)(幸村の兄)が東軍に付いている。真田当主の昌幸が、天秤に掛けて一族の生き残りを図ったのではとされている。この関ヶ原の戦いの結果、世は徳川の天下となり東軍に付いた信之が領地を許され、昌幸・幸村父子は高野山麓の九度山に流されている。その後、父昌幸が亡くなった後、幸村が、大阪冬の陣で鮮やかな戦い振りを見せ、その翌年の大阪夏の陣では、徳川家康に後一步のところまで迫ったことは広く世に知られている。久々に家康の心胆寒からしめ、真田一族の溜飲を下げる事ができた訳である。しかし、幸村も、漸く天下統一の地歩を固めつつあった徳川方の攻勢により、あえなく討死している。

5. 真田一族の残照

関ヶ原の戦いで東軍に付いたことにより上田の地を安堵された真田信之(のぶゆき)(幸村の兄)も、その後、移封(いほう)されている。徳川家康は、上田の地に根を下ろす真田の力を懼(おそ)れて、人と土地を分離したのである。上田城には仙石氏が入り、その後、上田城主は松平氏に代わり明治維新まで続いた。その間、中山道、甲州街道、北国街道が整備され、この地は交易の拠点として栄えた。

今や、真田一族の活躍は遙か昔のこと。それでも、現在の上田市には真田の名を冠する町があり、方々に六文銭の旗印ならぬ紋章を見ることができる。今なお、この千曲川流域の人々は、真田一族の戦い方の鮮やかさと、その治世を懐かしんでいるようである。その理詰めの戦法は、私のような技術畑の者にとっても大いに共感するところがある。また、真田一族が優れた民政術を持ち合わせていたことは、前後二回の上田合戦で大いに領民の協力を得ていることから読み取れる。因(ちな)みに、真田一族は、信玄が後世に信玄堤(つつみ)を残しているように、真田紐(ひも)、真田紬(つむぎ)を今の世に伝えている。

この真田一族の中で特に列強の間で恐れられた真田昌幸は、武田一族滅亡後、何度もまわりの勢力との帰服・離反を繰り返し、謀將の最たるもののように言われている。しかし、私は、昌幸こそ、卓越した戦術以上に優れた民政術を持ち合わせた武田信玄の、良き継承者であったのではないかと考えている。関ヶ原の戦いの進展によっては、信玄ゆずりの優れた民政を広く周辺地域にまでも及ぼそうとしたのではないか。徳川家康とは異なる手法でもって、まずは、信州を手始めにである。

昌幸の権謀術数のため、長男である信之は浜松、次男である幸村は春日山で人質生活を送っている。それにもかかわらず、信之・幸村とも、従容として、この昌幸の行かんとするところに付き従った

感がある。事は昌幸の思惑通りにはならなかったが、片や、家康にくみして一族の存続を果たし、片や生来の家康嫌いを通して大勢に抗(あらが)った。

6. おわりに

吉川英治の小説・三国志の冒頭は、劉備(玄德)青年が黄河の流れを見詰めて乱世を嘆いている場面である。また、鴨長明の方丈記の書き出しは、有名な行く川の流れは絶えずして・・・である。兎角、川の流れは、時に、人をして、懐古の情を起こさせるようである。いつの日か、悠久の歴史を浮かべて流れる千曲川の流域を再訪して、山々の間に残る戦国の余韻に浸りたいものである。ましてや千曲川には、それと聞くだけで、アルプスの雪解け水が谷あい刻んだ清流の響きがある。以上



古くから善光寺平(だいら)と呼ばれている長野盆地の、すっぽりと雪を被り静まり返った家々

以上